

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：34310

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K12889

研究課題名（和文）材木商冬木屋上田家による美術品収集と流出—商業的および文化的活動に注目して—

研究課題名（英文）Art collection and outflow by the Ueda family, a lumber merchant called Fuyukiya-focusing on commercial and cultural activities-

研究代表者

宮武 慶之（Miyatake, Yoshiyuki）

同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員

研究者番号：30760087

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：江戸の材木商冬木屋の商業的活動と文化的活動を研究した。商業的活動については、元禄期から正徳期に至るまでの冬木屋の致富の過程について、鹿島十分一番所の税請負、大山屋神戸家との取引、飛騨南山における元伐請負の記録から再構築した。文化的活動では冬木屋当主と芸術家との関係について、三代目政郷と英一蝶及び横谷宗珉、七代目喜平次と酒井抱一、八代目喜平次と喜田武清との交流が認められ、作画と所蔵品の拝見といった活動が確認できた。総じて、冬木屋の材木商としての活動と、致富の過程の再構築、さらには歴代当主と芸術家の関係は、美術史及び文化史における冬木屋の位置付けがより明確になったと結論することができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、資料の不足から明らかにされていない冬木屋本分家の活動を、過去帳と系図から明確にしたことで、美術史及び文化史研究に貢献する。また歴代を通じ、冬木屋を中心とした材木商をめぐる関係が、実際には商業的活動と文化的活動が混在していたことが確認され、当時の社会的背景を理解する上でも重要となる。また冬木屋の致富の過程を商業史の視点から研究し、不動産及び動産としての美術品収集の背景が明確となり、社会史分野にも貢献できたと考える。冬木屋における主要な作品の入手や芸術家との交流を、より明確にできる点で本研究のもつ社会的意義は重要と位置付けられる。

研究成果の概要（英文）：This study examines the commercial and cultural activities of Fuyukiya, a lumber merchant in Edo. The commercial activities of Fuyukiya from the Genroku period to the Shotoku period were reconstructed from records of tax contracts in Kashima Jubunichibansho, transactions with the Inuyama-ya Kobe family, and contracts for logging in the Hida Minamiyama area. In terms of cultural activities, the relationship between the Fuyukiya lumber merchants and artists, including Masago III, Ichou Hanabusa and Somin Yokoya, Kiheiji VII and Houitsu Sakai, and Kiheiji VIII and Takekiyo Kida, was confirmed through their activities such as viewing artwork and artifacts from their collections. In general, we can conclude that Fuyukiya's position in the history of art and culture is important because we were able to clarify the relationship between the successive heads of the family and the artists by reconstructing Fuyukiya's activities as a lumber merchant and the process of his enrichment.

研究分野：美術史

キーワード：商業史 文化史 近世絵画史 茶の湯 不動産 動産 材木商 来歴研究

## 1. 研究開始当初の背景

従来、江戸の材木商、冬木屋上田家の美術品収集は知られるが、材木商としての活動や、美術品をめぐる人的交流は明確にされていない。先行研究では、延宝三年の金杉堀の工事を冬木太郎右衛門が請け負ったことによる致富の過程が紹介される。しかしながら、冬木屋の過去帳と系図からこの名は確認できない。そのため本研究では従来の立場を取らず、冬木屋の材木商としての活動を再検証する。このことは商家による商業活動と、姻戚関係も含め、文化的活動には何らかの有機的な関係が考えられ、冬木屋における商業活動を明確にすることで、当時の文化的活動と美術品収集の背景を解明する。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は冬木屋のコレクション形成が商業的活動による致富と人的ネットワークによることを明確にすることである。そのため本研究では次の二点を明らかにする。

一点目は冬木屋の材木商としての活動とコレクション形成である。材木商としての活動では二代目弥平次と三人の息子である三代目政郷(弥平次)、四代目となる郡髯(喜平次)、分家初代となる政央(小平次)に着目した。これらの当主による致富と材木商としての活動に焦点をあてる。

二点目は冬木屋の人的交流である。従来、尾形光琳が深川の冬木屋に寄寓したとされるが、現在時点で文献資料から確認できていない。一方、三代目政郷と英一蝶の関係では、作画の依頼が確認でき、光琳以外の芸術家との交流を作品から明確にする。特に江戸時代後期の冬木屋と江戸の絵師との文化的交流も含め当時の人的交流と文化史的意義を研究する。

## 3. 研究の方法

本研究課題では冬木屋の本家および分家の所蔵した美術品に着目し、冬木屋との商業的または文化的交流による人との結びつきを明確にするため、より確実と考えられる江戸時代後期の資料より、江戸時代初期の事実へと、時代を遡る研究手法を採用した。

初年度には江戸時代後期の本家当主である七代目喜平次および八代目喜平次に焦点をあてた。当時の冬木屋では道具流出が確認できる一方で、依然として冬木屋本家で所蔵された作品が確認できる。また冬木屋当主と江戸の絵師との関係では酒井抱一や喜田武清との関係から、模作や拝見した作品記録から文化的交流を研究した。

二年度には冬木屋の分家である小平次家二代目と茶の湯文化の関係、さらには前年度に引き続き、江戸時代後期の冬木屋所蔵品について研究した。冬木屋旧蔵品にみられる仙々斎という人物の伝記について、冬木屋に関係する過去帳及び系図から二代目小平次である点を明確にし、千家との茶の湯を通じた交流について研究を行った。また冬木屋の新たな流出先として確認できた上田藩主の松平(伊賀守)家の資料にも着目し、入手の背景について研究した。

三年度は、三代目政郷の活動を商業史資料から明確にし、美術品収集との関係について研究した。二代目政親以降の材木商としての活動とともに、宝永期よりの飛騨南山における元伐との関係を明確にした。三代目政郷の活動した時期には、京における菩提寺の雲林院へ大燈国師墨蹟の寄進が確認でき、当時のコレクション形成にも注目した。また沽券情報を整理し、冬木屋本分家の所有した土地についての相続と売却状況、さらには寛政期の後見をめぐる争いについては分家同士の対立である点を明確にし、美術品及び土地の売却状況を研究した。

なお研究二年目に、現在の冬木家(明治維新に際して上田氏から冬木氏に改姓)より過去帳及び系図の提供を受け、一族の関係性も加えた研究が可能となった。

以上の研究方法により冬木屋の致富と関係する人間関係、さらには美術品収集や、それらの作品所蔵と絵師との交流から文化史的な意義を研究した。

## 4. 研究成果

### (1) 冬木屋の致富の過程

承応三年、初代直次が江戸南茅場町で材木商の冬木屋を創業する。従来、冬木屋の致富は、延宝三年の金杉堀の工事を冬木太郎右衛門が請負ったためとされる。しかしながら過去帳及び系図ではこの名は確認できない。特に太郎右衛門は石工として、初代直次が創業する以前より江戸で活動しているため、冬木屋の致富の形成過程に太郎右衛門が関係した可能性は低い。そこで新たな資料から冬木屋の致富の過程を再構築した。二代政親の活動として元禄期の冬木屋の活動では、天竜川の鹿島十分一番所での税請負、尾張の犬山屋神戸家との材木取引から、相応の規模で活動していた。特に三代目政郷の頃には、宝永元年よりの飛騨南山での元伐請負が主たる致富の要因となる。なお元伐においては弟である政央(小平次初代)が主導的な役割を果たし、政郷や弟の郡髯も関与した。この当時、三代目政郷による信仰に基づく寺院への寄進では、雲林院(京)、正眼寺(箱根)、達磨寺(鼻高)などで確認でき、致富と共に明確となった(文献)。

致富の過程と同時に、所有が時系列で確認できるのは、冬木屋の土地であるため沽券資料から研究した。沽券から創業の地である南茅場町をはじめ、三代目政郷より七代目喜平次に至る歴代による土地の入手及び相続が確認でき、相当な土地を所有していたことが確認できた。特にこれらの沽券の一部には、後見の名が記載されており、顕著であるのは七代目喜平次が幼少の頃であ

る。このことは『文政町方書上』中、寛政期に当主が幼少であった時期、後見を巡る対立の背景を考える上で重要となる。ここで述べた後見をめぐる対立とは、分家である小平次家と文右衛門家の対立となる。一方で冬木屋が所蔵した美術品の流出が文献上、確認できるのは天明期であり、六代目喜平次の頃となる。つまり六代目喜平次の頃より既に冬木屋では所蔵した美術品を売却し、その後、土地売却という資産売却の流れが確認できた。以上にみた資産整理は冬木屋が家の存続を図った点で重要である(文献)。

## (2) 三代目政郷の美術品収集と文化的交流

宝永五年、京において政郷は旧飛騨領主である金森家より千利休作竹花入銘「園城寺」(東京国立博物館蔵)、白雲子(比丘子分)・月江正印両筆墨蹟「癡絶道冲墨蹟跋」(個人蔵)、「龍巖徳真墨蹟」(重文 根津美術館蔵)の三作品を入手しており、冬木屋で確認できる初期のコレクションであると位置付けられる。また同年、政郷は京の菩提寺である雲林院に大燈國師「凧」(重文九州国立博物館蔵)を寄進し、その後も同院との関係は継続した(文献)。

政郷は正徳二年三月に没するが、同人の遺命として、正徳三年にやはり雲林院に英一蝶筆「仏涅槃図」(ボストン美術館蔵)が寄進されている。「仏涅槃図」についての先行研究では、河野元昭氏が、図中に在俗の婦女が描かれる点を指摘する(『國華(第1373号)』2010年)。本研究課題で、新たに注目したのは、図中に供花する童子が描かれる点である。過去帳及び系図から正徳二年正月に政郷の娘てるが没しており、約二ヶ月後には寄進を希望した父政郷も没した。そのため供花する童子とは政郷の娘てる、在俗の婦女とは政郷の妻だんの姿と判断される。特に「仏涅槃図」中の政郷の妻だんの姿は、夫子を喪い慟哭する姿として一蝶により描かれた作品となる。また軸先は二代政親の後妻の弟である横谷宗珉の作となるため、本涅槃図は当時の冬木屋の状況と交流を物語る作品であると結論した(文献)。

## (3) 冬木屋本分家と千家

従来、本阿弥光悦作赤樂茶碗銘「加賀」(重文 承天閣美術館蔵)は、裏千家七代竺叟宗室の箱墨書から仙々斎に伝来したことが知られるが、仙々斎の素性については従来、資料の不足から明らかにされていない。過去帳及び系図より仙々斎とは二代目小平次(政興)と同定された。原田茂弘氏により紹介される表千家六代覚々斎の茶会記から、冬木屋分家である小平次の茶会が紹介される(『茶の湯研究和比(第11号)』2019年)。本研究により、この茶会記は政興による茶会となり、茶人としての活動と、当時の小平次家が所蔵した美術品の把握ができた。また千家との茶の湯を通じた交流を資料から明確にした(文献)。

冬木屋の所蔵した樂長次郎及び本阿弥光悦の作品調査を行い、作品の所有と芸術家の作品への展開を研究した。冬木屋の所蔵した長次郎及び光悦作品の一部には、樂家六代左入による写しが確認できた。これらの関係性についても、作品を所有した冬木屋本分家と千家との交流による延長上での制作と理解できる。また左入による「二百之内」の茶碗作品には、明らかに光悦を意図した作品が存在し、左入の作風展開を考える上でも学習機会となった点で重要と位置付けた。冬木屋と千家との関係で重要な出来事は、寛延期、小平次家が所蔵した千利休筆「遺偈」(表千家蔵)を表千家家元千宗左(如心斎)の要請により譲渡する。その際、当主である三代目小平次(政房)は長次郎作の茶碗を所望し、応じた表千家では長次郎作黒樂茶碗銘「北野」(石川県立美術館蔵)を贈ること決め、さらに謝意を表するために利休筆「武蔵鐙の文」(東京国立博物館蔵)を贈っていたことが文献から確認でき、作品譲渡をめぐる状況がより明確となった(文献)。

## (4) 七代目喜平次と酒井抱一

従来、岡野知十によれば、酒井抱一による「八ツ橋図屏風」(出光美術館蔵)は、江戸の地廻り酒問屋の鴻池屋永岡家の依頼により冬木屋本家の所蔵する尾形光琳筆「八ツ橋図屏風」をもとに描かれたとされる(『雨華抱一』1900年)。そこで永岡家に関して冬木屋との接点を明確にするため研究した。関係が確認できた点は次の二点である。一点目は姻戚関係である。江戸には鴻池屋太郎兵衛をはじめとする鴻池屋が数軒確認でき、永岡家は太郎兵衛家の暖簾分けを許された番頭の家柄であり、別家となる。また本家筋にあたる鴻池(屋)栄蔵の妻は、分家小平次二代目の娘となり、やや距離感はあるものの姻戚関係が確認できた。二点目は南茅場町の土地である。同地で冬木屋は創業するが、分家に際して譲渡された土地のうち小平次家の相続した土地跡に、永岡家が営んだ鴻池屋が立地しており、沽券から直接の譲渡ではなかったものの、土地をめぐる関係性が確認できた。これらの関係から冬木屋と永岡家の関係性を明確にした。抱一による「八ツ橋図屏風」の制作にあたり、原画となる冬木屋が所蔵した光琳作品を拝見した点に関しては、牧野宏子氏が紹介した永野又次郎宛書簡(江戸東京博物館蔵)からも確認できる(『関東学院大学人間環境研究所報(第13号)』2015年)。これらの点から抱一による冬木屋での拝見は、七代目喜平次の時に行われたと考えられ、さらにその拝見は、やや限定的な作品にとどまった可能性がある。また永岡家と抱一の親しい交流に加え、当時の冬木屋と永岡家と抱一との文化的な交流が、制作背景に存在すると結論した(文献)。

## (5) 八代目喜平次及び九代目喜平次と喜田武清

江戸時代後期に冬木屋の所蔵品は流出したとされる。一方で、仲町啓子氏が指摘するように、江戸時代後期に活躍した絵師である喜田武清による文政五年の『武清縮図』(東京文化財研究所

蔵)には、冬木屋が所蔵した尾形光琳筆「松島図屏風」が掲載される(『光琳論』2020年)。この当時の当主は七代目喜平次となる。つまり流出した作品がある一方で、冬木屋では依然として作品を所蔵した点に着目した。この点を明確にするため、武清及び周辺の絵師の日記などの記録を博捜し、冬木屋との関係性に着目した。まず天保九年に「冬木小袖」(東京国立博物館蔵)には模写が付属し、武清によるとされる。当時の当主は八代目喜平次となる。また武清の弟子である山崎武陵は、当時、上田家の邸内に祀られた弁財天を描いていた(個人蔵)。つまり当時の武清周辺の人々と冬木屋当主との交流が確認できる。そこで武清とも親しくした亀戸天神の社僧である梅乃坊教覚による『宇米廻記』(東北大学附属図書館蔵)には、嘉永三年に実際に冬木屋の所蔵品を拝見した記録が含まれ、この当時の当主は九代目喜平次である。本資料から冬木屋所蔵品として古筆手鑑「隠心帖」(重文 個人蔵)、「蔦細道時絵硯箱」(重美 個人蔵)、尾形乾山筆「梅松図」(個人蔵)をはじめとする作品が確認でき、依然として多くの作品を所蔵していることが確認できた。また『武清縮図』から「松島図屏風」を拝見した同日、武清は本作品以外にも冬木屋で作品を拝見しており、依然として多くの作品を所蔵していることが確認できた。なお教覚の日記から、嘉永六年に冬木屋での光琳忌の開催が記録され、冬木屋の祖と光琳乾山が関係したとする伝承から顕彰されていたことが確認された(文献)。特に武清を中心とした江戸の絵師たちと冬木屋の歴代との交流を明確にできた。

#### (6)冬木屋本分家所蔵品の流出先

天明期、冬木屋から松平不昧に「富士山肩衝」(湯木美術館蔵)が譲渡されており、その後も多くの美術品が流出した。入手した大名のうち不昧以外で重要と目されるのは松平伊賀守である。冬木屋が所蔵した主要な唐物茶入のうち「油屋肩衝」(重文 畠山記念館蔵)は不昧が入手するが、もう一方の「弦付」(個人蔵)は伊賀守が入手する。また不昧、伊賀守では、冬木屋から多くの作品を入手しており、松平伊賀守も美術品収集で重要な家柄である点を明確にした。特に松平伊賀守の祖となる忠周は、徳川吉宗から「片輪車時絵螺鈿手箱」(国宝 東京国立博物館蔵)、「千歳時絵硯箱」(藤田美術館蔵)を享保年間に拝領し、これら以外には宮中からの拝領品も含めたコレクションを基礎とし、後の当主と茶の湯を通じた交流から収集された作品と判明する(文献)。

一方で冬木屋旧蔵品は富裕な町人も所蔵し、江戸三十間堀で弘前藩の財用に貢献した町人の鳥羽屋道樹は、冬木屋旧蔵の名物茶入「大正木」を入手した。道樹の美術品収集を明確にするるとともに、「大正木」を文政期に売却する際、江戸の蒔絵師である中山胡民に依頼し写しを作らせており、本作品は現在、東京国立博物館に所蔵されることが確認できた。作品の移動とともに、周辺の蒔絵師との関係も含め、茶の湯文化での交流や作品への展開が確認できた(文献)。

以上の点から冬木屋の材木商としての活動と致富、歴代と芸術家との関係や作品への展開、さらには美術品収集について詳細を論じた。これら以外には国外及び国内の学会発表、市民講座の開催、新聞などへの寄稿を通じて広く研究成果を公表した。

なお2026年11月27日より開催予定の福岡市美術館での展覧会「世を観る眼 生誕260周年 白酔庵吉村観阿展」を監修する。本展覧会では目利きとして活躍した観阿の江戸での交流に加え、観阿が冬木屋旧蔵品を所蔵した点に注目し、江戸の茶人における冬木屋旧蔵品の意義にも焦点をあてる。また展覧会図録では総論を執筆予定である。(文献)。鴻池屋永岡家に関しては江戸時代後期の冬木屋本分家及び酒井抱一との関係について詳細を論じ、単著として2026年秋に発刊する(文献)。

#### <引用文献>

宮武慶之「材木商冬木屋の致富と美術品収集 三代目政郷の活動に注目して」『人文』22号, 学習院大学人文科学研究所, pp. 205-226, 2024年(査読有)。

宮武慶之「寛政期の冬木屋上田家にみる不動産及び動産 相続と売却」『文化情報学』第19巻1号, 同志社大学文化情報学会, pp. 118-133, 2024年(査読有)。

宮武慶之「英一蝶筆「仏涅槃図」(ボストン美術館蔵) 供花する童子に注目して」『文化情報学』第19巻1号, 同志社大学文化情報学会, pp. 134-146, 2024年(査読有)。

宮武慶之「冬木屋小平次と千家との関係 加賀光悦にみる仙々斎を中心に」『研究紀要』32号, 野村文華財団, pp. 21-34, 2023年。

宮武慶之「江戸の材木商・冬木屋上田家所蔵「長次郎と光悦」(1)『陶説』848号, 日本磁協会, pp. 21-27, 2024年。

宮武慶之「江戸の材木商・冬木屋上田家所蔵「長次郎と光悦」(2)『陶説』849号, 日本磁協会, pp. 34-45, 2024年。

宮武慶之「鴻池屋・永岡儀兵衛の周辺 「五節句図」に付属する抱一書簡二通に注目して」『文化情報学』17号, 同志社大学文化情報学会, pp. 1-15, pp. 2022年(査読有)。

宮武慶之「鴻池屋・永岡儀兵衛の周辺(2) 南茅場町における美術品収集の意義」『文化情報学』17号, 同志社大学文化情報学会, pp. 16-35, 2022年(査読有)。

宮武慶之「江戸時代後期の冬木屋所蔵品と周縁 『宇米廻記』を起点として」『人文』20号, 学習院大学人文科学研究所, pp. 409-428, 2022年(査読有)。

宮武慶之「上田藩主松平家のコレクション形成 名物道具の移動を中心に」『人文』21号, 学習院大学人文科学研究所, pp. 207-236, 2023年(査読有)。

宮武慶之「鳥羽屋道樹について(二) 江戸での交流と収集の姿勢」『研究紀要』31号, 野村文華財団, pp. 18-31, 2022年。

展覧会「世を観る眼 生誕260周年 白酔庵吉村観阿展」福岡市美術館主催. 会場福岡市美術館, 会期2026年11月27日より2027年1月19日(予定)。

宮武慶之『永岡成美の文事(仮)』淡交社, 2026年(予定)。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>宮武慶之                              | 4. 巻<br>22            |
| 2. 論文標題<br>材木商冬木屋の致富と美術品収集 三代目政郷の活動に注目して    | 5. 発行年<br>2024年       |
| 3. 雑誌名<br>人文                                | 6. 最初と最後の頁<br>205 226 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし               | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）       | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>宮武慶之                              | 4. 巻<br>19(1)         |
| 2. 論文標題<br>英一蝶筆「仏涅槃図」（ボストン美術館蔵） 供花する童子に注目して | 5. 発行年<br>2024年       |
| 3. 雑誌名<br>文化情報学                             | 6. 最初と最後の頁<br>134 146 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし               | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）       | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>宮武慶之                              | 4. 巻<br>19(1)         |
| 2. 論文標題<br>寛政期の冬木屋上田家にみる不動産及び動産 相続と売却       | 5. 発行年<br>2024年       |
| 3. 雑誌名<br>文化情報学                             | 6. 最初と最後の頁<br>118 133 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし               | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）       | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>宮武慶之                              | 4. 巻<br>848           |
| 2. 論文標題<br>江戸の材木商・冬木屋上田家所蔵「長次郎と光悦」          | 5. 発行年<br>2024年       |
| 3. 雑誌名<br>陶説                                | 6. 最初と最後の頁<br>21 27   |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし               | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難      | 国際共著<br>-             |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>宮武慶之                         | 4. 巻<br>849         |
| 2. 論文標題<br>江戸の材木商・冬木屋上田家所蔵「長次郎と光悦」その二  | 5. 発行年<br>2024年     |
| 3. 雑誌名<br>陶説                           | 6. 最初と最後の頁<br>34 45 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>宮武慶之                          | 4. 巻<br>21            |
| 2. 論文標題<br>上田藩主松平家のコレクション形成 名物道具の移動を中心に | 5. 発行年<br>2023年       |
| 3. 雑誌名<br>人文                            | 6. 最初と最後の頁<br>207 236 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし          | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)  | 国際共著<br>-             |

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>宮武慶之                          | 4. 巻<br>32          |
| 2. 論文標題<br>冬木屋小平次と千家との関係 加賀光悦にみる仙々斎を中心に | 5. 発行年<br>2023年     |
| 3. 雑誌名<br>研究紀要                          | 6. 最初と最後の頁<br>21 34 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし          | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難  | 国際共著<br>-           |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>宮武慶之                           | 4. 巻<br>20            |
| 2. 論文標題<br>江戸時代後期の冬木屋所蔵品と周縁 『宇米迺記』を起点として | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>人文                             | 6. 最初と最後の頁<br>409 428 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし           | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難   | 国際共著<br>-             |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>宮武慶之                                 | 4. 巻<br>17          |
| 2. 論文標題<br>鴻池屋・永岡儀兵衛の周辺 「五節句図」に付属する抱一書簡二通に注目して | 5. 発行年<br>2022年     |
| 3. 雑誌名<br>文化情報学                                | 6. 最初と最後の頁<br>16 35 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                 | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている(また、その予定である)          | 国際共著<br>-           |

|   |                    |
|---|--------------------|
| 1. 著者名<br>宮武慶之                              | 4. 巻<br>17         |
| 2. 論文標題<br>鴻池屋・永岡儀兵衛の周辺(2) 南茅場町における美術品収集の意義 | 5. 発行年<br>2022年    |
| 3. 雑誌名<br>文化情報学                             | 6. 最初と最後の頁<br>1 15 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし              | 査読の有無<br>有         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難      | 国際共著<br>-          |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>宮武慶之                         | 4. 巻<br>31          |
| 2. 論文標題<br>鳥羽屋道樹について(二) 江戸での交流と収集の姿勢   | 5. 発行年<br>2022年     |
| 3. 雑誌名<br>野村美術館研究紀要                    | 6. 最初と最後の頁<br>18 31 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計12件(うち招待講演 9件/うち国際学会 1件)

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>宮武慶之                           |
| 2. 発表標題<br>千利休竹花入銘「園城寺」について 宝永五年の冬木屋による入手 |
| 3. 学会等名<br>茶の湯文化学会 令和6年度総会・大会             |
| 4. 発表年<br>2024年                           |

|                                       |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>宮武慶之                       |
| 2. 発表標題<br>江戸の材木商・冬木屋上田家 ふたつの唐物茶入の流出後 |
| 3. 学会等名<br>陶説主催 オンラインやきもの文化講座（招待講演）   |
| 4. 発表年<br>2024年                       |

|                                     |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>宮武慶之                     |
| 2. 発表標題<br>永岡家・酒井抱一のパトロン            |
| 3. 学会等名<br>陶説主催 オンラインやきもの文化講座（招待講演） |
| 4. 発表年<br>2024年                     |

|                                     |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>宮武慶之                     |
| 2. 発表標題<br>世を観る眼 吉村観阿・白酔庵           |
| 3. 学会等名<br>陶説主催 オンラインやきもの文化講座（招待講演） |
| 4. 発表年<br>2024年                     |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>宮武慶之                             |
| 2. 発表標題<br>江戸の材木商・冬木屋上田家所蔵 「長次郎と光悦」         |
| 3. 学会等名<br>日本陶磁協会主催 第3回 オンラインやきもの文化講座（招待講演） |
| 4. 発表年<br>2023年                             |



|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>宮武慶之                        |
| 2. 発表標題<br>英一蝶筆「仏涅槃図」(ボストン美術館蔵)と冬木屋上田家 |
| 3. 学会等名<br>同志社大学人文科学研究所 第14研究研究会(招待講演) |
| 4. 発表年<br>2023年                        |

|                           |
|---------------------------|
| 1. 発表者名<br>宮武慶之           |
| 2. 発表標題<br>松平伊賀守のコレクション形成 |
| 3. 学会等名<br>茶の湯文化学会近畿例会    |
| 4. 発表年<br>2023年           |

|                                    |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>宮武慶之                    |
| 2. 発表標題<br>溝口家の茶の湯文化研究 冬木屋への展望     |
| 3. 学会等名<br>浄念寺(新発田市)における市民講座(招待講演) |
| 4. 発表年<br>2023年                    |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>宮武慶之                          |
| 2. 発表標題<br>美術品移動から探る文化への影響 茶の湯に着目して      |
| 3. 学会等名<br>同志社大学人文科学研究所第14研究第4回研究会(招待講演) |
| 4. 発表年<br>2022年                          |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>宮武慶之                             |
| 2. 発表標題<br>英一蝶筆「仏涅槃図」（ボストン美術館蔵）にみる冬木屋上田家の周縁 |
| 3. 学会等名<br>茶の湯文化学会 近畿例会                     |
| 4. 発表年<br>2022年                             |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Yoshiyuki Miyatake   |
| 2. 発表標題<br>Cultivated Taste: the tea tradition and utensil collections of Lord Matsudaira Fumai             |
| 3. 学会等名<br>7th Ocha Zanmai: San Francisco International Conference on Chanoyu and Tea Culture (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年<br>2022年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>宮武慶之                           |
| 2. 発表標題<br>美術品移動から探る文化への影響 茶の湯に着目して       |
| 3. 学会等名<br>同志社大学人文科学研究所第14研究第4回研究会 (招待講演) |
| 4. 発表年<br>2022年                           |

〔図書〕 計1件

|                     |                 |
|---------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>宮武慶之      | 4. 発行年<br>2024年 |
| 2. 出版社<br>淡交社       | 5. 総ページ数<br>-   |
| 3. 書名<br>永岡成美の文事(仮) |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

|   |
|---|
| <p>1 展覧会の監修<br/>宮武慶之（監修）, 展覧会「生誕260年 世を觀る眼 白醉庵吉村觀阿」福岡市美術館主催, 会期2026年11月27日より2024年1月19日.</p> <p>2 招待講演<br/>宮武慶之「溝口家の茶の湯文化研究 冬木屋への展望」浄念寺における市民講座, 2023年5月5日, 浄念寺（新発田市）.<br/>宮武慶之「江戸の商家と茶の湯 酒井抱一と永岡儀兵衛を中心に」公益財団法人国際茶道文化協会青山グリーンアカデミー, 2022年10月25日（オンライン）.</p> <p>3 雑誌の連載<br/>宮武慶之「茶人・波和遊 [第1回]」名物裂手鑑「文龍」本屋惣吉を巡って」『淡交』78巻1号, 2024年.<br/>宮武慶之「茶人・波和遊 [第2回]」尾形乾山筆「梅松図」八代目・冬木屋上田喜平次の場合」『淡交』78巻2号, 2024年.<br/>宮武慶之「茶人・波和遊 [第3回]」徐熙の白鷺 文化五年の松屋」『淡交』78巻3号, 2024年.<br/>宮武慶之「茶人・波和遊 [第4回]」新兵衛瓢箪茶入銘「空也」の周辺 無盡蔵・切屋八左衛門」『淡交』78巻4号, 2024年.<br/>宮武慶之「茶人・波和遊 [第5回]」大正木 鳥羽屋道樹の場合」『淡交』78巻5号, 2024年.<br/>宮武慶之「茶人・波和遊 [第6回]」酒井抱一筆杜若屏風 永岡成美の場合」『淡交』78巻6号, 2024年.</p> |
|---|

| 6. 研究組織                   |                       |    |
|---------------------------|-----------------------|----|
| 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|